

新刊紹介

山本 薫

**George Z. Gasyna, *Polish, Hybrid, and Otherwise:
Exilic Discourse in Joseph Conrad and Witold Gombrowicz***
Continuum, 2011. 288pp.

本書は、Joseph Conrad と Witold Gombrowicz (1904-1969) という二人のポーランド人亡命作家のアイデンティティ創造の詩学をモダニズムからポストモダニズムの流れの中で位置づけようとする英語で初の本格的な比較研究である。コンラッドもゴンブローヴィッチもノーベル文学賞候補にのぼるほどの世界的な作家であるにもかかわらず、彼らの比較研究はなぜ「英語で初」なのだろうか。例えば西成彦や沼野充義による東欧の「移動文学」や「亡命文学」論においてゴンブローヴィッチの名前が挙がる時、「成功した」同郷の先輩としてコンラッドが必ずと言っていいほど言及されるが、反対にコンラッドを論じる文脈でゴンブローヴィッチが言及される機会はどれだけあるだろうか。もちろんここには、今ではその作品が各国語に翻訳されているとはいえ、ゴンブローヴィッチがもっぱらポーランド語で創作活動を行ったこと（著者 Gasyna はスラブ語・スラブ文学の専門家である）、コンラッドがまずは「英国の作家」として論じられる機会が圧倒的に多いという各国別文学の制度の問題がある程度関係しているだろう。

まるでそのような状況に抗うかのように著者が本書の中で繰り返し強調するのは、二人の作家を何よりもまず「ポーランド（人）の」亡命者として考えねばならないということであり、そうした考えから彼は、コンラッドとゴンブローヴィッチが亡命者としての自己構築を記録している作品、書簡、エッセイ、記事、インタビュー等のあらゆるテキストを“exilic discourse”と呼んでいる。しかし、ここでは伝記的事実とテキストの間の単純な照応関係は前提とされていない。著者は、Michel Foucault の“heterotopia”（ミメティックにも地理的にもはっきりと定位できない場所）という概念

に依拠し、亡命者の「希望の場所」を開こうとする二人の作家の言語的実践を比較している¹。

一括りに「ポーランド（人）の」「亡命」といっても、ポーランドの地主貴族の「名譽ある」亡命の典型的なパターンで、当時決して珍しいわけではなかったコンラッドの場合と違って、ゴンブローヴィッチが「亡命」にいたる事情には偶然の要素と本人の意志が混在している。

現代ポーランド作家の中でも最も前衛的かつ独創的なヴィトルド・ゴンブローヴィッチは、1904年に中部ポーランドの（コンラッドと同じ）地主階級シュラフタ(szlachta)の家に生まれ、戦前はおもにワルシャワで過ごし、1926年ワルシャワ大学の法科を出て自由奔放な生活のかたわら創作活動に入る。おしきせの縁談や徴兵から逃れるため1927年から29年にはパリに遊学し、哲学および経済学を修め、帰国後はワルシャワの裁判所の書記をつとめるが、結局一年ほどで辞め、文学の道へと踏み出す。長らくボヘミアンの生活を送り、1939年（この頃には20世紀ポーランド版ユリシーズの遍歴物語とも称される『フェルディドゥルケ』(*Ferdydurke*)(1937)を出版していたゴンブローヴィッチは既にポーランドで前衛作家として名が知れていた)、世界大戦勃発の一ヶ月前、ポーランド-南米航路の記念航海に來賓として招待され、たまたまおもむいたアルゼンチンのブエノスアイレスで、祖国に侵攻したヒトラーに英仏が宣戦布告し開戦したことを知る。そのままその地にとどまる道を選び（このあたりの経緯について、ポーランドのヒロイックな愛國的伝統と個人の間の葛藤を描いた『トランス=アトランティック』(*Trans-Atlantik*)(1953)に、「志願兵募集委員会に顔を出し[...]そこで、兵役不適格者として勿ねられた」とあるが、真偽のほどは定かでない)²、戦時のロンドン亡命政権にも、戦後の人民政権にも馳せ参じようとはせず、その後1963年に移住したフランスの地について亡命者としての生涯をとじた。

「ポーランド性」を強調するといっても、自らもポーランド移民の第二世代で、「ポーランド人民共和国時代(1952-1989)の終盤の最も暗い時代に4人の子供を連れてポーランドから[アメリカ]へ移った」両親の話がきっかけで、幼少時から「領土」「亡命」「アイデンティティ」といった問題について常に考えるようになったという著者(viii)が、二人の亡命作家を「ポー

ランド文学」の伝統の中に回復し、その中で位置づけようとしているのではない。第1章“*The Condition Known as Exile*”で述べられているように、二人の亡命作家の Polishness が強調されるのは、“cultural in-betweenness” (20) としての彼らの「自己」(とテキスト)の雑種性(hybridity) (単純に故郷や亡命先の国の文化や言語の総体という意味ではなく、それらが結びついて新たな言語や文化が生じる過程)を言うためであり、“in-betweenness”こそ、亡命を余儀なくされた exilic な作家の領域であると著者は述べる。二人の作家が自己を表現し、また彼らの世界観を形成する上で、亡命者であることと雑種性が相互にどう影響しあっているのかがこの章で議論されるが、ここでは、亡命はこれまで言われてきたような悲劇的な体験やトラウマとしてではなく、むしろ、「一つの家に縛られた者には閉じられた可能性」(99)に満ちたものとして積極的にとらえられ、単一の論理、言語、文化の言説を超え、「新たな創造の場」(21)の探求を有利にする存在条件であると同時に戦略として考えられている。

“*Crossing the Thresholds of Modernist Discourse*”と題された第2章では、これまでよく議論されてきたモダニズムとポストモダニズムの間の断絶／親子関係を理論化する方法の再検討を背景に、モダニズムからポストモダニズムの流れの中で二人の亡命作家の位置づけが試みられる。創作活動時期で言えば、コンラッドはモダニズム運動の起点に、ポーランド時代はハイ・モダニスト的前衛作家であり、アルゼンチン亡命時代にポストモダンの詩学に傾いていったゴンブローヴィッチはモダニズムのちょうど終点に位置する。しかし、予想されるように、著者はそうした位置づけの難しさをむしろ浮き彫りにし、コンラッドとゴンブローヴィッチが、はっきりとした国家的、文化的、文学的領域や分類におさまらず、新たな言説によって埋められるべきユニークな領域を志向していることを示唆している。

興味深いのは、著者が Gilles Deleuze と Pierre-Félix Guattari の提唱した「マイノリティ」の詩学という概念に依拠してゴンブローヴィッチ文学を考察しようとする試みである。ドゥルーズ=ガタリの言う「マイナー文学」とは、マイナーな言語による文学ではなく、ドゥルーズ=ガタリがドイツ文学の伝統の中で創作するユダヤ人作家 Franz Kafka の読解を通して示したように³、マイノリティが、英語やフランス語などの広く使われている言

語を用いて創造する文学である。従って、自作を自分でスペイン語に翻訳したことはあるものの主にポーランド語で創作したゴンブローヴィッチは厳密にはこの意味での「マイナー文学」にあたらないように思われる。ところが、著者は、祖国ポーランドをメトロポリタンを中心に見立て、その中心（あるいは共産主義時代の東欧）に対して地理的に外部から「自律した東欧的主体」を（既に定義されている既存の主体ではないものとして）書こうとしたゴンブローヴィッチの周辺性、逸脱性、いまだ生成されざるもの(the “not-yet-formed”)を志向する側面に「マイノリティ」の詩学の特徴を見る。戦前の保守的なポーランド社会からスキャンダル視され、コンラッドのように「裏切り者」のレッテルを貼られていたゴンブローヴィッチは、著者によれば、まさに「他者化」、「脱領土化され」(deterritorialized)、政治的な関心をどうしても引いてしまうポストモダンの「マイナー文学」と言えるらしい。

英語で書いたコンラッドは、ドゥルーズ=ガタリの言う「マイナー文学」の名によりふさわしいように思われる。ところが、著者は、マイノリティと他者にポレミックな場を開くのがポストモダンの言説のエートスだとすれば、英国の文学の、しかもモダニズム運動という文化的エリートの「マジョリティ」に分類されがちなコンラッドは、「マイノリティ」と結びつきにくいと述べ、コンラッドの（モダニスト的）「マジョリティ」としての「一面的な」イメージにゆさぶりをかけようとする。

まず著者は、モダニスト的な主体の詩学の範疇に入るコンラッドの断片化された経験の表象を、（モダニスト的主体が行う）リアリスティックな表象と、無限な差延としての意味作用というポスト構造主義的姿勢の間に位置づけ、また、世界のヴィジョン構築の前提は、話し手の主観的眼差しに従属するアプリアリなものなのだから、世界のヴィジョンをリアルに表象することは不可能だというコンラッドの考えが、Hayden White のポストモダンの構築主義やフーコーの「（看守・教育者・精神病医などの）専門家の眼差し」とそれほどかけ離れてはいないと指摘する。確かに「英国作家」や「モダニスト」というマジョリティとしてのコンラッドのイメージは彼自身が生成しようとした自己イメージだったが、結局その試みは成功しておらず、コンラッドは、英国と「英語という広大で贅沢な家」の中で

馴染めない“displaced nobleman”であり、「ポーランド（人）の」作家であり続けたと著者は主張する(90)。

第3章“Life Writing”では、常習的な自己神話化癖のある二人の亡命作家のアイデンティティ・ゲームの源を彼らのエッセイ、回想録、書簡等のいわゆる life writing に探り、亡命者としての存在条件と言語空間が互いに浸透しながら heterotopic な言語空間を出現させ、新たな言説——自己記述の哲学——を形成するに至るかが示される。

よく知られているように、コンラッドは祖国ポーランドをほとんど書かなかつた（とは言え、著者から見れば、コンラッドのテキストにおいて、ポーランドは中心的なメタファーとして常に出現しているし、亡命した語り手や登場人物にとって祖国のシニフィエとなっているらしい）。それでも、「プリンス・ローマン」(“Prince Roman”)(1911)や『個人的回想録』(*A Personal Record*)(1909)などのポーランドを題材にした数少ない作品でコンラッドは、命運尽きた祖国の大義への自暴自棄な愛を描いている。一方、ゴンブローヴィッチはポーランドの儀式化された自己犠牲的愛国的態度からの自律性を獲得しようとした。著者は、この二人の亡命者の life writing をつきあわせ読み、読者の得られる情報が常にまた聞きあるいはそのまた聞きであるため、語り手と読者の間の直接のコミュニケーションがほぼ不可能であるモダニスト的距離の詩学から、デフォルメされた「自分自身の物語」を語り手が「直接」語るポストモダンの詩学へのシフトを迎える。ただ、ゴンブローヴィッチの自己の心理描写に(コンラッドの回想録に見られるような)祖国喪失者(他者)としてのノスタルジックな投影を期待することはできない。テキストの空間は、語り手ゴンブローヴィッチの記憶によって主観的なもの(the subjective)で埋め尽くされるのだが、atemporal で自由な言語空間である。コンラッドが文人として初めて自らの他者性を公にした『個人的回想録』を含むポーランドを扱った作品も、単に自伝的であるという次元を超えて、今はもう疎遠になってしまった故郷とそこに住んでいた過去の自画像に想像の上で立ち戻って、亡命者としての自分に利用可能な語りの空間(narrative spaces)を探しながら行う言わば「測量(“land surveys”)」であり、その時、テキスト空間は「地図」となる(124)。その意味で、コンラッドの life writing は、交錯する様々なペルソナの単なる総体(各部分か

ら成る全体) というよりは、heterotopic な空間を志向していると考えられる。

ゴンブローヴィッチの2作目の小説『トランス=アトランティック』を論じた第4章と、コンラッドの『ノストロモ』(*Nostromo*)(1904)を論じた第5章は、二章で比較作品研究を構成している。著者はここで二つの exilic discourse の heterotopic な構造——厳密に直接言及的でもなく、地理的にはっきりと定位できず、明確な領域性を持たない言語の「非-場所(“non-place”)」——を指摘し、これらの物語を「世界創造(world-making)の実験」として読もうとする。

ヨーロッパの想像力の中で、例えばエル・ドラド(*El Dorado*)といった神话生成における他者として機能してきた南米を舞台とするこれら二つの物語は、亡命者による亡命者のための国家建設のアレゴリーとして読むことが可能であり、ユートピアのイメージと戯れている。しかし、フーコーの heterotopia は、言わば、「不在のユートピア」(*an absent utopia*)(250)であり、「共同性」を志向するが、「個人的自由の言語空間(“a linguistic zone of individual freedom”）」(250)でもある。それは知覚する個人のレベルで機能すると同時に、言語的空間と言語的空間の見過ごされた隙間で可能となるパーフォーマティブな一種の「実践」である。自己を刻印する技法でもある heterotopia の関心はテキスト間、文化間、言語間の交渉にあり、その究極の目的はより深い間主体的な自己認識と言えよう。ここで文明や世界を支える土台に疑問を突き付ける領域構築的(zone-creating)なポストモダン小説の要素を『ノストロモ』の古典的なモダニスト的語りを読み込むことによって、著者は再度モダニズムとポストモダニズムの範疇化が近年においても完全に満足のいくものではないことを論証している。

そして、首つりになったスズメの謎を語り手がメタフィジカルな捜査として追う反-探偵小説『コスモス』(*Kosmos*)(1965)を論じた第6章では、ゴンブローヴィッチがモダニスト的主体の認識論を徹底的に解体し、ポストモダンの主体の盛衰を辿る過程が分析される。意味づけし構成しようとしてもできない現実のカオスを主題としたこの最後の作品で、ゴンブローヴィッチは、主体にとってのさまざまな現実を反映する生産的な形式としての小説の将来を容赦なく否定している。とりつかれたように事実を収集

し続ける意識過剰で未熟な語り手「ヴィトルド」は、主観的なものを超えることができず、自分自身の内部にへたり込み、奇抜な着想に耽る。それでも彼はモダニストの語り手のように統一性と秩序を求めて、いかなる知の範疇にも入り得ない解釈不能で heterotopic な間隙にとび込んでしまう。語り手である「私」(ヴィトルド)は、自分の目の前にありながら自分が手にしているあらゆる表象装置を超える裸の「現実」を、「国家」「家族」「異性愛規範性」(heteronormativity)という「大きな物語」に一方で依存して語り(制御し)つつ、他方でそこからの自律性を保とうとするが結局は失敗に終わる。それでも、この意識過剰なポストモダンの主体の「失敗」の刻印として生まれた文学作品『コスモス』は、自己解放の手段としての芸術の潜在能力を否定すると同時に肯定している。

ここまで、アイデンティティと亡命を共時的な軸に、モダニズムとポストモダニズムを通時的な軸として、reluctant なモダニストのコンラッドからポストモダンな反小説の作家ゴンブローヴィッチを巡る様々なテクストの領域を旅してきた我々に、ポストモダニズムは、そして、西洋のあるいはその他の世界で(otherwise)「主体」は一体どこへ向かうのかという問いが残される。結論“Identity and its Displacements: Some Closing Axioms”で著者は、苦境にあるポストモダンの亡命作家を代表する Salman Rushdie が *Le Monde* 誌のインタビュー(2004)で行った文化的孤立主義の終焉宣言に触れ、これまで相互に排他的であった様々な世界や現実の間の対話と理解の新たな可能性を考える。著者は、慣れ親しんだ既知のもの(givens)を奪われた二人の亡命ポーランド人作家にとっての唯一の「希望の場所」(heterotopic zone)が二人の exilic discourse にいかにか表現されているかを論じてきた。コンラッドやゴンブローヴィッチのように、複数の空間に居場所を見出すことができればそれはすばらしいことかもしれないが、そのような境地にいたるまでの道のりは往々にして悲劇、孤独、絶望の痕跡に満ちているものだ。必ずしもそのような苦しい道りを迎えずとも、アイデンティティを損なわずに他者の存在に彩られた heterotopia の可能性を認め、自国の文化の中に「他者とともにある現実」(reality with the other)(255)を見い出して増幅させていくことはできるかもしれない。受容しやすいように馴致された無害な既存の他者像を生産・消費し続けることは、『コスモス』の語り手

や正気を失ったある登場人物のように、「ベンベルグをベンベルグ、ベルグで！」(ゴンブローヴィッチの造語)と自己完結した意味不明の独白をただ繰り返すことになる——と著者は結ぶ。

有名な“a knitting machine”のメタファーで知られているように⁴、初期のコンラッドにおいて「コスモス(宇宙)」と言えば、無慈悲で非情な(impersonal)宇宙であり、その中で弄ばれる卑小な人間の苦悩する心理の小宇宙だった。後期のコンラッドは個人の心理という意味での personal な cosmos を前期ほど描出しなくなるので、その点が長く彼の想像力衰退の証とされてきた。では、コンラッド最後の未完の歴史小説『サスペンス』(*Suspense: A Novel of Napoleonic Times*)(1925)で、若き英国人の主人公にコスモ(Cosmo)という名が与えられているのはどういうことなのだろうか⁵。ゴンブローヴィッチが最後の(反)小説『コスモス』で見せた個人的主体の末路(解放?)は、コンラッドの世界(宇宙)を考える上で様々なヒントを投げかけているように思えるし、もしかしたら、ほとんど読まれることもない晩年の作品——personal な cosmos が描かれていない物語群——を再評価するなんらかのきっかけを与えてくれるかもしれない。もちろん似たことは『コスモス』以外のゴンブローヴィッチ文学にも、そして、著者がしなやかに渉猟していたフーコーを含む現代の思想家の鍵概念にも言えるだろう。このように、本書は、二人のポーランド人亡命作家のテキストの対話から新たな読みの場(可能性)を開こうとするまさに heterotopic で刺激に満ちた研究である。

注

¹ 著者自身が付記しているように、ゴンブローヴィッチとコンラッドの共通点を論じたポーランド語の研究書や英語の論文なら既に存在する(3)。また、フーコーの“heterotopia”を援用した英語のコンラッド論としては、Robert Hampson, “Conrad’s Heterotopic Fiction: Composite Maps, Superimposed Sites, and Impossible Spaces,” *Conrad in the Twentieth-First Century: Contemporary Approaches and Perspectives*, Carola M. Kaplan, Peter Mallios, and Andrea White eds. (New York and London: Routledge, 2005) 121-135 を、また、研究書としては、Coroneos, *Con. Spaces, Conrad, and Modernity* (Oxford: Oxford University

Press, 2002)を参照。

- ² 西成彦による「解説—非国民作家のエクソダス」参照。米川和夫訳『フェルディドゥルケ』(平凡社) p.535. ゴンブローヴィッチについてはこの解説を参考にさせていただいた。
- ³ ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ、宇波 彰訳『カフカーマイナー文学のために』(法政大学、1978)
- ⁴ “It knit us in and it knit us out. It has knitted time space, pain, death, corruption, despair and all the illusions—and nothing matters.” Letter to R.B.Cunninghame Graham, 20th December, 1987. *The Collected Letters of Joseph Conrad* Eds. Frederick R. Karl and Laurence Davies. Vol. 1. (Cambridge: Cambridge UP, 1983) 425.
- ⁵ 著者 Gasyna は、「コスモス」という壮大なタイトルについて、ゴンブローヴィッチが、「人生と肉体についての考察」と「芸術についての考察」の統合を一つの作品世界(コスモス)の中で試みたと解釈している(64)。

(やまもと かおる 滋賀県立大学准教授)